にえの柵と藤原泰衡

二井田は米代川の支流犀川に沿う集落で、にえの柵と呼ばれる城があり、平泉藤原氏の家臣河田次郎の居城であったという。平泉藤原氏四代泰衡が源頼朝に追われ、にえの柵の河田次郎を頼るが裏切りにあって討たれた話は史実であるが、その間の事情を地元では次のように語り伝えている。

むかし二井田には「にえの柵」と呼ばれる城が築かれ、平泉の藤原氏の一族で河田次郎という侍が城主となって比内（大館地方の古称）地方を治めていた。そのころ鎌倉将軍と呼ばれた源頼朝が日本を統一していたが、大きな勢力をもつ平泉藤原氏に不信をもち、中央の命に応じないことや、義経を討ったことを口実に泰衡を打つことになった。泰衡は頼朝のため平泉を追われ、エゾ地をめざして逃げのびようとして、親類筋にあたる河田次郎の守るしがらみ城（にえの柵）に身を寄せるが、頼朝が出した「泰衡をとらえたり討ったものは百万石の大名にとりたてる」という触れ状を知って、河田次郎は「泰衡をかくまって罪になるより、泰衡を討って恩賞を」と考え、主人殺しの罪にならずに泰衡を討つ計画を練った。その計画は、旧の九月三日の夜に実行された。河田次郎は達子森に多くの家来を送り、たいまつをかざし、どら・かねを鳴してときの声をあげ、大軍が攻め込んだようによそわせた。城内外の物音に目をさました泰衡に「今、家来の報告では、頼朝の大軍が四方から攻めてきたとのこと、早速城を抜け出しましょう。わたしも供をします」と、達子森の様子を示しながら城外へ連れ出し、「まことに残念ですが、敵はもうすぐです。もう逃げのびることはできません。わたしもお供します。自害しましょう」とさそうと、泰衡は「わたしから自害します。かいしゃくを頼みます、迷惑をかけてすまない」と切腹したという。一説には、河田次郎の計画を察知した泰衡が夜遅く城を抜け出すが、まわりが真暗でおまけに地理に不案内、河田次郎の軍に追いつかれ、二井田の出向（いでむかい）でついに自害したともいう。

河田次郎は計画通りにいったことを喜び、頼朝のもとへ泰衡の首をとどけるが、主人殺しの罪で頼朝に「不忠の臣」として首をはねられるという結末になった。